

んどですが、その緊張感や交流がスタッフの成長にプラスとなっていていきます。

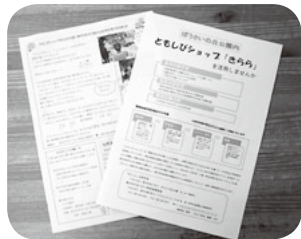
誰もがここで何かを学んでいる

地域のためにシヨップを活用してほしいと、市育成会が小学校へ呼びかけたところ、教員の職場体験研修先の一つになりました。

「障害があっても働けることを実感してほしい。子どもにとって身近な存在である、先生の意識が変わる意味は大きい」と市育成会は期待しています。体験した教員からも、「障害者を助けることが役割と思い込んできたが、自分が助けてもらう方が多かった」と感想が寄せられました。

また、特別支援学校等の「買物体験学習」や「就労体験学習」の場としても活用され、参加した生徒は、新しいことをやり遂げた自信の表情を見せてくれるそうです。

これらの企画は、打ち合わせや支援スタッフの増員に手間がかかり、売り上げにも結びつきませんが「シヨップがここで働くスタッフだけのためにあるのではなく、地域みんなの財産であることにこだわりたい」と風間さんは言います。



活用のシヨップを作成してチラシを呼び掛けている

その出会いやふれあいは、参加した人々の中に、学校や教科書だけでは学べない経験や気づきを提供しています。

「ポエム10」誰かの役に立つことが生きがいになる

「ポエム10」は、昨年十月に横浜市栄区のあるすぷらぎに開店し、地域交流を目的とした、「多機能型」ともいふシヨップモデル事業」の指定も同時に受けた店舗です。

「障害者や外国人、子育て世代、高齢者、みんなが気軽に参加できるような場がない」という思いから、誰でも安心して立ち寄り、さまざまな形で参加できるようなシヨップを目指そうと、地域で活躍してきたボランティアの方々を中心となりシヨップを立ち上げ、今や協力者は五十名を超えています。

店長の中和子さんは、長年ボランティア活動をしていますが、障害者就労に関わることは初めてでした。

「市の健康福祉局や障害者就労支援センター、生活支援センター等と新たに関係を築きました。スタッフの適性に合う仕事を探し、社会人としてのルールを教えるなど、一つずつ見えてきた課題を解決しながらサポートすることは大変ですが、自信をつけて成長していくさまには目を見張るものがあります」と語ります。また、モデル事業の一つとして、

「スペシャルデー」を不定期に開催しています。これは、ボランティア活動に参加する外国籍の方が中心となり、自国の料理を紹介しながら、地域の人たちに楽しく参加してもらう交流会です。「日本語に不自由する外国人も、見方を変えればハンデイキヤップがある人と気づいた時、障害がある人も外国人も、高齢者も子育て世代も関係なく、誰かの役に立つ仕事がしたいと感じ、それが生きがいになると強く思った」と中さん。

交流や出会いは自分たちでつくる

シヨップでは、壁面を活用した貸しギャラリーという活動をしています。障害のある方や子ども、外国籍の方のアート作品を紹介するために、場所を提供しています。ほかに

作業所の手作りパンやグッズ販売、地元イベントにも出かけることができる。店として協力、地域との交流に力を惜しみません。



シヨップの開所式には、地域の関係者や協力者の方々が多数集まりました

さまざまな人が出会い、交流し、おのおのが体感できる機会をつくりだせるように仕掛けを考え、地域に発信し続けています。

地域の中で育まれる力

今回の取材で、いつも利用している方や声をかけてくれる近隣住民、苦情が寄せられた窓口でシヨップの趣旨を説明してくれる行政職員の存在など、さまざまな人たちによってシヨップが支えられていることが、改めて見えてきました。

そして、①スタッフが地域の方々と共に働き、仕事を任せられることで働く意欲や自信をもって成長していること、②シヨップが地域との触れ合いを通じて、気づきや学びの場として機能していること、③障害の有無や年齢、国籍などにかかわらず、誰もが自分の役割と生きがいを、人々の輪の中で紡ぎだすことを実感しました。

ともしびシヨップの誕生から二十年以上が経過し、各店舗は障害のある方に寄り添う大切さを地域に伝え、さまざまな協力を求めながら、その支援を力にして自立していく思いを継承してきました。地域の支え合いから生まれた可能性と進歩を信じて、その店舗の特性や持ち味を引き出していけるよう、本会としても支援を続けていきたいと思えます。

（ともしび運動推進担当）